

法華經…価値創造の道⁽¹⁾

ロケツシユ・チャンドラ

このたび私たちは魅惑の都パリに集って、法華經についての対談集『仏教…価値の道⁽²⁾』発刊を慶賀しております。パリといえは、一二〇〇年にこの地に創設された大学〔パリ大学〕を想起します。尊厳王と呼ばれたフィリップ二世の尽力によるものでした。この大学は、キリスト教を信じるすべての国々において最も有名で最も活気のある、母なる学び舎³となり、欧州全域から青年を受け入れました。また、パリ (Paris) は、ギリシャ伝説におけるトロイの王子パリス (Paris) を賞揚するヨーロッパで唯一の首都であり、パリスはその美貌

と強さで知られ、ギリシャ美術で若き美男として描かれています。⁽³⁾

ヨーロッパ初の法華經翻訳

ほかならぬこのパリにおいて、ウジェーヌ・ビュルヌフ (Eugène Burnouf) / 一八〇一―五二⁽⁴⁾ が、一八四一年には、法華經の第五章〔葉草喻品〕を訳し終えていました。これは、超絶主義を唱えていたソローやエマソンといった影響力のある思想家の注目するところとなりました。⁽⁴⁾ ビュルヌフのこの翻訳こそ、法華經が初めて

No Image

インド・ビハール州の「ナーランダー大学（僧院）」跡 (from Wikimedia Commons)。世界遺産。グプタ朝時代、5世紀の創設とされ世界最古の大学のひとつ。唐の玄奘など各地から俊英が集い、最盛期には1万人の生徒と1500人の教師がいたという。12世紀末にイスラーム勢力によって大学は破壊され、インド仏教滅亡を決定づけた。現在、インドでは「ナーランダ大学復興プロジェクト」が進展しており、新ナーランダ大学が2014年、授業を開始した

ヨーロッパ大陸にたどり着いた瞬間でした。彼は法華經全章の翻訳を完成させましたが、これは現代の言葉に法華經が全訳された最初の出来事でした。彼は仏教研究の最初の礎を築き、事実上、近代仏教学の父となつていきます。「ドイツの東洋学者」ユリウス・モール (Julius Mohl / 一八〇〇ー七六) はビュルヌフをこう讃えています。「彼は歴史の上にまったく新しい道をいくつも切り拓きました。さらに彼は、文献研究者の人生として最も見事で最も充実した壮麗な模範を示しており、それ自体がフランスにとって榮譽に値するものであります」と。ビュルヌフのもとでサンスクリットを学んだマックス・ミュラー (Friedrich Max Müller / 一八三二ー一九〇〇) のような優れたドイツ人インド学者たちの指導により、日本の仏教者も近代仏教学の中で名譽ある地位を得たのです。⁽⁵⁾

ナーランダ僧院と「一乗」經典

偉大なフランスの中国学者スタニスラス・ジュリアン (Stanislas Julien / 一七九七ー一八七三) は、一八五三年

から五八年にかけて、玄奘三蔵のインド旅行記〔大唐西域記〕を初めて翻訳しました。玄奘三蔵は、〔グプタ朝の〕シャクラーディティヤ (Sakraditya) 王が「一乗 (エカヤーナ)」を尊重し、三宝を崇敬したと述べています。⁽⁶⁾ 王は佳き地を選び、ナーランダに最初の僧院を立てました。この王こそ、インド史の黄金期であるグプタ朝のクマールグプタ一世 (Kumaragupta I) 〔在位四一四―四五〇/帝日王〕であります。法華経は、世界的に有名なナーランダ大学の設立にあたり、一乗の最高の經典として歴史的な役割を果たしたのです。

もうひとりのフランスの伝説的な中国学者エドゥアル・シャヴァンヌ (Édouard Chavannes / 一八六五―一九一八) は、唐王朝時代に法を求めてインドを訪れた六十人の高僧の伝記〔大唐西域求法高僧伝〕を翻訳しました。その伝記は、義浄 (六三五―七一三) によって書かれたものです。義浄は、朝鮮の新羅王朝の僧・慧輪の生涯について述べていますが、慧輪はナーランダの僧院について詳しい記述を残しています。〔ブッダガヤの〕マハーボーディ寺院 (大覚寺) の北東七由旬 (駅) あま

りのところに、ナーランダ僧院がある。ウッタラパタ (Uttarapatha / 北インド) の僧侶であるラージャヴァンシヤ (Rajavansha) のために、帝日王により建立された」⁽⁷⁾ 慧立〔玄奘の弟子〕は、玄奘三蔵の伝記〔大慈恩寺三蔵法師伝〕の中で、バーラーディトヤ王 (Baladitya / 幼日王) はナーランダ僧院を増築し、そこには中国僧が滞在したと述べています。王は、中国から来た僧の人生に感動したあまり、後に王位を捨てて出家しました。⁽⁸⁾

フランスの学問は、グプタ朝の王たちが一乗の教えに厚く帰依した結果、ナーランダ僧院設立において法華経が特筆すべき役割を果たしたことを明らかに示しました。そしてまた、ナーランダには、韓・朝鮮半島や中国の僧らが頻繁に来訪していたことも。

生命の開花と上昇をもたらす

法華経は、生命への目覚めです。その精神的メッセージの豊かさ、美しさ。それは「大乘仏教文献の王者」です。王たる仏陀は、クシャトリアの瞑想の法を行い、聖なるエネルギーの命への降臨を象徴する存在となり

ました。ウパニシャッドの中には、この瞑想の方法が秘蔵されています。『チャインドーギヤ・ウパニシャッド』第八章第一節には、次のようにあります。

「このブラフマンの都城（身体）の比喩的表現」の中に、小さな白蓮華の家屋（「心臓」の比喩的表現）があり、その中に小さな空間がある」「この心臓の内部にある空間の広さは、この虚空の広さと同じである」⁹⁾

「全宇宙が『彼（ブラフマン）』の中にあり、『彼』は我らの心臓の中に住んでいるのである」

蓮華は、魂の純粹さと人間の精神的努力との象徴であります。すなわち人間は、この流転の世界と生死海への愛着を断ち切って、白蓮のような心の純白を得ようと努めるのです。白蓮はひとたび泥中より咲き出れば、「それまで自らがいた」この下界に染まることはありません。こうした自然と私たちの精神とは、深い意味を表す表象において一体です。中国の僧・智顗（五三八―五九七）は、蓮の「華」と「実」の関係を、譬喩的イメージを用いて解説しています。蓮の華は、実を作るために存在しているわけではありません。そして蓮の

実は、華が落ちるときに、完全に成熟したかたちで現れます。それはあたかも一時的な仮のもの（迹）が払われて、真実（本）だけが残るようなものです。宇宙の万物と究極の真理は相互に作用し合っています。成長する蓮華が想起させるのは「生命の海の大きなうねりに根差しながら、人間の最深の根源的なものを開花させていく」生き方です。

法華経に内在しているのは、妙なる力によって人間を奮起させ、立ち上がらせ、動かし、前進させるという開かれたプロセスです。法華経は、自己開花の活動を表現する多くの崇高なイメージを生み出しています。それらのイメージが示しているのは、あたかも花々が理想の太陽に顔を向けるように、人を動かしていく思想です。法華経は、大地に根を張りながら、力強く天の世界に入っていくのです。法華経が、その純粹さと開放性をもって、また明日へと続く永遠の若さをもって探求しているのは、「今」という瞬間と「永遠」との統合であり、人間の意識という「内なる世界」と果たしなき「天の世界」との統合であります。

日本の僧・慈円（一一五五―一二二五）は詠みました。

いづ方も残さず行きて尋ねとも花は御法の花ばかりこそ⁽¹⁰⁾

すべての蓮の種には「夢」が秘蔵されています。ただかたちのない満開の蓮華の姿を蔵しているのです。この夢が、ゆっくりと開きゆくつぼみから伝わってきます。そして、人は夢に動かされ、心を揺さぶる理想のイメージに動かされるのです。こうして点火された心の中で、炎が育ちます。その炎は、言葉となつてあふれだし、行動となつて燃え上がります。この炎こそ、すべての光の源であり、明日を生み出す源なのです。価値の創造——それは初め、まったき静寂であり、根源的実在は冷凍睡眠の状態にあります。やがて、静寂は音へと捧げられ、凍てついた眠りは目覚ましき行動へと捧げられ、意味は言葉に、言葉はかたちある現実

に捧げられていくのです。蓮は純粹さの象徴です。そして、蓮の種子を蓄えた果托は須弥山の頂を表しています。蓮の華は、人間を暗闇から輝く光の世界へと上昇させる象徴として、最

深の神聖な実在へと導いていくのです。

文化的変奏への広い余地

法華経の提婆達多品には、仏陀の前世についての物語が書かれています。国王であった仏陀は、法華経の教えを得るために、自分の王国を去つて、仙人に仕えました。仙人のために、薪を拾い、水を汲み、草を摘みました。この話から、日本の僧・行基（六六八―七四九）の歌が生まれました。

法華経をわが得しことは薪こり菜つみ水汲み仕へてぞ得し⁽¹¹⁾

この歌は、法華経を基にしながら自由に変奏するという伝統に由来します。

world（世界）と words（言葉）、すなわち nature（自然）と culture（文化）という現象は、互いに似せながら、互いを映し出すという動的な関係にあります。それを知るならば、自然と文化はもはや対立してはいないので

す。それに気づくことが、人生の質を高めるエピステーメー（真知）となるのです。

法華経は、現在のビハール州にあった王舎城の靈鷲山で、仏陀によって説かれました。数々の吉祥があり、天は花の雨を降らし、大地は揺れました。多くの人々と神々が集い、説法が始まるのを待ち焦がれています。仏陀が光を放つと、その光が宇宙を照らします。経が説かれるにつれて、瑞兆が続きます。舍利弗は、説かれたメッセージの素晴らしさに喜んで、舞い踊ります。そして法華経は、経そのものが崇拜される信仰対象へと高められていきます。それにもかかわらず、序品に約束された説法は、決して説かれることがないのです。法華経は、その中心部が空洞になっています。その中身は無垢のまま、何らかの解釈によって満たされることを待っているのです。

塩入良道氏は「法華経の構造とテキスト内容の双方が示唆することは、法華経の根本的性質というものは、広く受け入れられ、無限と思えるほど多くの文化的状況に適用されうることである」と述べています。⁽¹²⁾法華経は断定することなく、「解釈への」広い余地を残しているのです。法華経の長い経歴の中で、歴史と神

秘が、力と詩が、説教と美学が、ひとつに織り合わされてきました。法華経の真義は、語られた物語とテキストの言葉から引き出されるとともに、その構造にも示されています。

法華経では、釈迦牟尼はもはや命あるもののために従う歴史的人物としては考えられていません。永遠を生きて、現在と未来の一切衆生を利益する存在として描かれています。人間としての仏陀ではなく、超越的如來です。彼が歴史的的存在として顕れ行動するのは、人類を救うための巧みな手段（方便）なのです。宝塔が現れる第十一章は、仏陀の地上での顕現を超越的なレベルへと移行させます。多宝如來は宝塔の座の半分を釈迦牟尼に分ちます。釈迦牟尼は、そこに坐して蓮華座（結跏趺坐）をし、重大ではあるものの歴史的時間に属していた教説を打ち払って、「永遠の法」を開示していくのです。

法華経は、「一乗」の教えの最高にして明瞭な表現であり、「声聞・縁覚・菩薩の三乗は一乗に人々を引きつけるための三つの方便であった」と宣言しています。

この経は、成仏へ導くためのもろもろの説法について統一的に説明するのです。

すべての生命が相互に浸透

森羅万象の軌跡は、菩提樹下での釈迦牟尼の四十九日もの長い瞑想の中に流れ、悟達のあとでナイランジヤナー河（尼連禪河）のほとりに釈迦牟尼がおられた中に流れ、河の堤で乙女スジャータが乳がゆを供養した中に流れ、そして釈迦牟尼に法を説いてほしいと説得した梵天の中に流れます。それは、一念三千の視覚化でした。三千とは、諸現象の相互浸透の限りなさを表しています。サンユクタ・アーガマ（雑阿含経）とエーコーッタラ・アーガマ（増一阿含経）は次のように描いています。

ピッパラ（菩提樹）の下で、行者ゴータマは、その巨大な力を瞑想へと集中させて、自分の肉体をじっくりと見た。彼は、体の細胞一つ一つが、誕生と生存と死とを無限に繰り返す川の流れの一滴

の水のようであるのを見た。その肉体の川と混ざり合った感覚の川があった。彼のすべての感覚が、その川の一滴であった。瞑想の中で、シッダールタは青空に映えるピッパラの葉を見上げた。葉の先端が前後に揺れ、まるで彼を呼んでいるようだった。葉をじっと見つめていると、彼には太陽と星々の存在がはつきりと見えた。太陽がなければ、光と温かさがなければ、葉は存在できない。……彼はまた、葉の中に雲の存在を見た。雲がなければ、雨は降らない。雨が降らなければ、葉は存在できない。彼は、大地、時間、空間、心を見た。すべては葉の中にあった。事実、あの瞬間、一枚の葉の中に全宇宙が存在していた。葉の存在そのものが、驚くべき奇跡だった。⁽¹³⁾

動物、植物、山々、そして人間は、密接な関係性と生命の相互依存により共鳴し合っています。生あるものとその環境、広大な宇宙と人間。それらはひとつのものなのです。私たちの世界は、さまざまな不均衡と、

消耗や災害で焼かれ焦げついてしまっています。この世界を未来世代のために護るのに必要なのは、世界の多面的な現実から離れることなく活動する「精神性を運ぶ乗物（教え）」です。

「人類」と「自然」が織りなされて一体になるには、ただひとつの道しかありません。それは「菩薩道」によってのみ可能になるのです。「菩薩の人間の基調をなす」宇宙生命からの発想⁽¹⁴⁾、未来からの発想⁽¹⁴⁾への転換⁽¹⁴⁾が必要なのです。

公害、地球温暖化、ツナミ……抑えつけられ、くぐもつたうめき声から、荒々しい風がうなりながら私たちの心に吹きつけてきます。だからこそ、いにしえの日本の詩人の言葉を忘れてはならないのです。「詩歌というものは、人の心という種から、幾万の葉のような言葉となって生まれてきたのだ（やまと歌は人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける）」⁽¹⁵⁾と。

ヴィナヤ（律蔵）には、仏陀と僧たちが他の客たちとともに浄飯王の宮殿（カピラ城）に食事に招かれた様子が書かれています。仏陀は苦を超える方法について説

法をしました。そして仏陀は微笑み、このように話したのです。「しかし、苦しみは人生の一面でしかありません。人生には別の面が、すなわち驚異に満ちた一面があります。もし、私たちが人生のその面を見ることができれば、幸福と安穩と喜びを得るでしょう。私たちの心がとらわれていなければ、私たちは人生のもろもろの驚異を直接に体験できるのです。私たちが、無常・無我・縁起の真理を本当に体得したならば、私たちの心と精神がどれほど驚異的であるかがわかります。私たちの肉体が、紫竹の枝が、金色の菊花が、澄んだせせらぎが、皓々たる月が、どれほど驚異に満ちているかがわかるのです」⁽¹⁶⁾

「新たな思考法」を求めて

法華経は、人類が自らのもつ遺産を限りなく活用できるよう、その果てまで導いてくれる渡し船であり、私たちが生き延びるために必要なものをつかめるようにしてくれます。法華経は、賤が家にも光を注ぐ月光のように、運命の香りを豊かにします。人は物理的宇

宙の中に生き、象徴的宇宙の中で開花します。人類の文化的能力は、まったく新しい次元への進化を経験できるし、経験せねばなりません。「人間はもはや生物学的基盤に依存しないようになっており、自然とは独立した存在である」という誤った考えは通用しなくなるでしょう。生き残るのにふさわしいものが何かは、生命と自然を基準に決めるべきです。文明社会の「自由」なるものが、自らの子孫を食うことなど許されません。私たちは、いつまでも「環境税」に頼り続けることはできないし、牧草を再生するようにすべてを再生するわけにもいきません。

古典的物理学の物質主義の基礎は崩壊しています。科学自体が、物質はエネルギーであり、プロセスは事実と同様に根拠があることを証明しており、宇宙の非物質性を肯定しているのです。科学のおよび人文科学的な「二つの文化」の出会い、ものの見方を正常に戻し、新世紀における「認識学」の基盤となるでしょう。二つは高まりつつ、ひとつになっていくことでしょう。そして、「量（大きさ）」と質（価値）は自然の根源で共存

している」という古代の見識に新たな意味を与えていくでしょう。「未来に向けての」人間の歩みには、人道的に無責任になる余裕などありません。私たちには、人間の意識と行動を統合する中心部が必要です。美しさとは高潔さをもった世界、宇宙的人間主義に献身し奉仕する世界を心に描く必要があります。そうするなかで私たちは、オリバー・L・ライザー（Oliver L. Reiser／一八九五―一九七四）博士が言うところの「ワールド・センソリウム（世界中枢）¹⁷」を育てることができるのです。そうすれば、やがて人類社会は内なる自己に出会い、万物の相互依存を明らかにできるのです。有機的な宇宙の秩序の中には、孤立した体系は存在しません。人間は誰しも、また人間のどの部分をとっても、鳥のように他から切り離されてはいけません。

真つ暗な夜に、人は光を探します。深部からわいてくる欲求によって、意識の夜明けを求めるのです。人は世界のキャンバスを塗り替えたい、永遠なるプロセスの最も根源に存在するものを再評価したいと願います。現実にあるものと想像されたものの中から「未来

の王国」が生まれ出ます。そこでは、人は自分自身を超えて、文化のダイナミックな担い手となるのです。

人は、今日という川を渡り、まだ見ぬ明日という向こう岸へと進んでいきます。未開の地を渡ることは、人間の本性です。般若心経で「ガテ、ガテ、パーラガテ、パーラサンガテ、ボーデイ、スヴァーハー（往ける者よ、往ける者よ、悟りの彼岸に往ける者よ、悟りの彼岸に完全に往ける者よ、悟りよ、幸あれ）」と鳴り響いている部分です。この波羅蜜多（到彼岸）は、心を啓発し、導き、樹下の静穏へと私たちを呼び集め、生命に慈悲と智慧と美を広げます。この波羅蜜多において、人間は、他のすべての人間、すべての生命、すべてのものごと、すべての星々、永遠なるすべての虚空の一部です。我々は、新たな思考法 (*forma mentis*) を追求する永遠の旅人です。タゴールの詩にこうあります。

「旅人は自分の家に着くまでに、余所よその家の門を一訪れなければならない。そして、最後にもっとも奥の神殿に達するまでには、外のあらゆる世界

を彷徨さまよわなくてはならない」⁽¹⁸⁾

フランス語という、うっとりするような魅力的な言語で、このほど発刊される対談集は、法華経における時空を超えた、価値化する力の歴史における進化がテーマです。この書は「人間らしく生きることが、人生の喜びと美にならねばならない」「私たちと自然は相互に依存しており、それゆえに自然は私たちに畏敬の念を求めるのである」との意識に新たに火をつけてくれるものです。万物が調和して栄えゆくために、私たちは人間同胞と、そして自然とも分かち合って生きていかねばならないのです。

〔 〕内は邦訳に際しての補注

訳注

- (1) 原題は *The Lotus Sutra*。邦題は内容から意識した。
- (2) ロケッシュ・チャンドラ博士と池田大作SGI（創価学会インタナショナル）会長との対談集『東洋の哲学

を語る』（日本語版は二〇〇二年刊）のフランス語版である *Le bouddhisme ou la voie des valeurs - Un dialogue sur la création de valeurs à travers l'histoire*（仏教あるいは価値の道——歴史を通じての価値創造についての対話）。シンポジウムの前月、二〇一六年三月に、パリの L'Harmattan 社から発刊された。

- (3) 首都パリの名前に関する伝承のひとつ。先住していたケルト民族のひとつ「パリシイ (Parisii) 族」に由来するとも言われる。

- (4) エマソンとソローらの編集による季刊誌『ダイアル』(Dial) の一八四四年一月号に「仏陀の教え (The Preaching of Buddha)」のタイトルで仏典の英訳が掲載された。その一部が法華経の葉草諭品であり、ビュルヌフによる仏訳からの重訳であった。これは世界初の法華経の英訳とされ、訳者をソロー自身とする説もある。

- (5) マックス・ミュラーは、一八四八年に渡英し、一八五〇年、オックスフォード大学教授になった。南條文雄や笠原研寿、高橋順次郎が同大学でミュラーに師事し、帰国後、日本における近代的仏教研究の先駆者となった。また、二万冊近くのミュラーの蔵書が東京帝国大学へ寄贈された（関東大震災により焼失）。

- (6) 玄奘『大唐西域記』巻九。「佛涅槃後未久。此國先王鑠迦羅阿逸多唐言帝敬重一乘遵崇三寶。式占福地建此伽藍」（大正大藏經第五一巻、九二三頁中）。「仏の

涅槃の後、まだ余り時がたたないころに、この国の先王の鑠迦羅阿逸多（原注唐に帝日と言う）は一乗（成仏する唯一の教え。仏教）を篤く信じ三寶を尊重し、りっぱな土地を選んでこの伽藍を建てた」（中国古典文学大系22『大唐西域記』水谷真成訳、平凡社、二九六頁）

- (7) 義浄『大唐西域求法高僧傳』巻上の慧輪法師の項。「大覺寺東北行七驛許至那爛陀寺。乃是古王室利鑠羯羅睺底。爲北天苾芻曷羯羅社槃所造」（大正大藏經第五一巻、五頁中）。「大覺寺の東北に七驛許を行けば那爛陀寺に至る。乃ち是れ古王室利鑠羯羅睺底（シュリー＝シャクラディティヤ）が北天の苾芻（ビクシュ／僧）曷羯羅社槃社（ラージャヴァンシャ）の爲に造る所なり」（足立喜六訳註『大唐西域求法高僧傳』岩波書店、一九四二年、九七頁。〔〕内は訳注）

- (8) 『大慈恩寺三藏法師伝』「婆羅阿逸多唐言幼日次東北又建伽藍。後見聖僧從此支那國往赴其供。心生歡喜捨位出家」（大正大藏經第五〇巻、一二三七頁中）

- (9) 『原典訳ウパニシャッド』岩本裕編訳、ちくま学芸文庫、一六八―一九頁

- (10) 『拾玉集』巻四「詠百首和歌」。方便品「唯一乘法」の句につけた歌。

- (11) 『拾遺和歌集』巻二十

- (12) 論文集 *The Lotus Sutra in Japanese Culture* (George Jōji Tanabe, Willa Jane Tanabe 編、ハワイ大学出版会、一九

八九年）所収（三六頁）の論文「The Meaning of the Formation and Structure of the Lotus Sutra」から翻訳。塩入良道氏（一九二二―八九）は大正大学教授を務めた。

- (13) Thich Nhat Hanh, *Old Path White Clouds: The Life Story of the Buddha*, London: Rider, 1992, pp.152-3. 同書には典拠として「雜阿含經」二八七（大正大藏經第二卷、八〇頁中）。「爾時世尊。告諸比丘。我憶宿命未成正覺時。獨一靜處。專精禪思。作是念。何法有故老死有。何法緣故老死有……」、「增壹阿含經」三八・四（大正大藏經第二卷、七一八頁上）。「爾時世尊告諸比丘。我本爲菩薩時未成佛道中有此念。此世間極爲勤苦。有生有老有病有死……」などが挙げられている。

- (14) 池田大作「環境問題と仏教」から。『東洋学術研究』第二九巻一号、一二八頁
- (15) 紀貫之による「古今和歌集仮名序」冒頭の言葉。

- (16) 浄飯王は釈迦牟尼の父。前掲 *Old Path White Clouds*, p.233. 同書には典拠として「律藏」大品・第一大健度五四（南伝大藏經第三巻、一三八頁以下）その他が挙げられている。

- (17) ライザー博士はアメリカの哲学者。 *The World Sensorium: The Social Embryology of World Federation*, NY, Avalon Press, 1946（世界中枢——世界連邦の社会的発生学）の著書がある。

- (18) 英語本『ギーターンジャリ』第十二詩より。『タゴール詩集』渡辺照宏訳、岩波文庫、二四三頁

Lokesh Chandra インド文化国際アカデミー (International Academy of Indian Culture) 理事長。インド文化関係評議会 (ICCR) 会長。仏教とウェーダ、インド美術研究で名高い。1927年、インド・アンバーラーに、サンスクリットの権威ラグヴェイラ博士を父として生まれる。ラホールのパンジャブ大学卒業後、オランダのユトレヒト大学で博士号を取得。サンスクリット、パリー語等、20以上の言語に通じ、仏教に関する著書が400冊以上ある。主著にアジアの仏教・芸術・文学・歴史の文献を集めた『シヤタピタカ（百の法藏）』シリーズがある。また、インド上院 (Rajya Sabha) の議員（1974―86年）、インド歴史学研究所協議会 (ICHR) 副会長も務めた。2006年、インド政府から「パドマ・ブリーシヤン (Padma Bhushan) 勲章」が贈られた。